

にしてくれるが、集団になるとモスクワである。帰化問題を政治局員に頼んだが、日本人はみんな日本へ帰りソ連のことを見たまま聞いたまま伝えてほしいと断られる。なにはともあれ、帰る日の来るまで耐えて生き抜くより仕方がなかった。

思ひ出の抑留記

和歌山県 嘉成 一郎

新京郊外の孟家屯を出発した列車は途中国境より引き揚げの開拓団の人々を乗せた列車と出会い、お互いに元気でねと挨拶を交わしながら黒河に着いた。

ここで河を渡る舟に穀物類を積み込む使役をさせられた上に、ブラゴエシチエンスクに渡り、さらに乗りついで列車はいつの間にか虜囚列車ということになっていった。あるときは列車からおりて列車の後押しをしたり、駅で何時間も停車を繰り返しながらゴビの砂漠を南下して、五十数日ぶりにアングレンという人間の住みそうも

ない荒野の中に放り出されたのです。

平素健康体であった私の身体も列車に乗せられてからマラリヤに冒されたのか、下車してからすぐに半分地下になっている天幕づくりの病室に入り、板ベットに寝かされた。

何も食べることもできない高熱に苦しみながら数日が経過した。意識の底でここが我が人生の終点であるのかと思ひながらベットで男泣きに泣いたものである。

なげなしの二十五ルーブルを全部はたいて、ソ連の軍医に頼んで買ってきてもらった小さなリンゴを一食ごとに二個ずつを食べて、二十個を食べて終わったところにやっと少し元気を取り戻したものです。

やがて退室できるようになり、十分に回復したものと云えないまでも松岡小隊長らに迎えられた。外に出れば二百人ほど入ることのできる幕舎が十棟ほど並んでいた。

幕舎の中は両側に二階段の板ベットがあり、犬小屋の犬のように抑留の同胞戦友たちが顔を出して迎えてくれました。

翌日より寒風吹きさぶ河原で掘り下げられた河底を一層深く掘り下げる作業であったが、水が流れていてその作業量がわからない興味のない仕事であったので、みんな作業らしいものをせずにスコップを動かすだけであつた。

三百グラムの黒パンと飯ごうに半分を満たないスープでは寒さが加わり増すにつれて体力が次第に落ちてゆくばかりであつた。

朝は暗いわずかな光の下で四時ころに起床して飯ごう半分のかゆをすすり、幕舎外の空地に十列横隊に並んで人員点検を受けるのであるが、ソ連兵は我々を一人々と数えてゆくのだから時間のかかること、いつも一時間以上はかかった。七時に出発というのに人員点呼に時間を費やして体力を消耗するしウンザリさせられた。

大型のクレーンで河を掘り、その土砂で台地をつくり、またこの土砂を運ぶための鉄道をつけるのである。レールを運んだり枕木を敷いたりする作業が連日連夜続いた。体力のない者には大変な重労働であつた。またあるときはこの土砂を、トラックで遠方に運んで荒野の中

に道路をつくる。夜間作業に狩り出されたときはところどころにしか点灯されていない暗い電球の光を頼りに、野原におろされた土砂を敷いて五メートル幅の道をつけていくのだが、大きな石を取り除くにも力がない。八時間の労働を終えて幕舎に帰り激しい疲労のためにただ寝るばかりで、昼過ぎに起床して朝食と昼食を同時に食べても腹いっぱいにならずにまた五時ころまで寝込んでしまふのです。

ある日隊長より自分を含めて四人炭坑大隊へ転属を命ぜられた。炭坑の仕事は食糧も多いということであつたが、なんとなく気が進まない。多分ソ連のことだ、保安設備も不十分で危険なことが多いだろうと思ひ、難儀なことになつたなと気にしながら待機していたところ、幕舎の外で農業経験者はいないかとの呼び声があつたので外に飛び出して申し込んだところ、幸ひ早速装具をまとめて衛門に集まれとのことであつた。

どんな仕事か待っているのかわからないが、この際なんとしてもここを逃げ出さねばと思ひ衛門に向かつた。そこにはすでに各幕舎から来た五十人ばかりの者が集

まっていました。

トラックに分乗して河原かと思われる道を四、五時間走ったろうか、着いたところは草ぶき屋根の幕舎があり、すでに他の収容所からも大勢入居していた。この中に小学校同窓の池田君がいて二十年ぶりの不思議な再会でありうれしい出会いであった。お互いに何よりも力強く勇気づけられてそれ以後は助け合うことができたのである。

農場でも仕事は先発隊が植えつけをして自分たちは収穫や米作の地づくり等であったが、この地方はマラリアの病原地であるといわれ、ある日は三百人中半数の百五十人くらいも就寝していることもあった。日本の軍医が私たちのことを思って休ますために余り病人をつくり過ぎるとソ連側の軍医は少々熱があっても患者を作業に追い出すことがあった。重症の患者を戸板にくくりつけて野菜トラックの上に乗せ中央病院に運ぶのを見たが、この私も長く熱が下がらぬために送られるときはマイクロバスであった。入院後半月ほどで全快したのは幸いであったが、悪いことにそのころ、腸チフスが発生し、各

地より入院して来たために、全快しても退院が許されず病院なみの少ない食事で内務の仕事させられたのです。たまたま病院内を歩いていたときに、コンクリートの部屋に何体もの死体が裸のまま積み重ねられているのを見たが、それをどのように扱われたかしららないが、ソ連の軍医の研究用に解剖されるらしかった。そのうち退院を許されて戻ったのは元の第二大隊ではなく第三十六大隊で、ここでの作業は石井少尉の下で主として十キログラムくらいのブロックをつくる作業所に通った。

当初一人のノルマは六十五個であったものが七十五個になり、終わりころには九十三個にもなるととても達成できるものではなかった。今まで四百五十グラムの特級食にありつこうと頑張ってきたが、どうやらダモイが近づいたらしいのでお互いに健康第一に働こうと話し合った。

一番私の不愉快に思ったことは、日本人の共産オルグの一人が我が作業隊に配属されて労働の勤怠表をつくり本部に送って、作業を怠けるとダモイが遅れるといううわさが出たことであった。このアングレンでは一年半を

過ぎたころより共産教育が始まり、若い者たち五十人ばかりが作業にも出ずに若干の報酬をもらって勉強していたようであった。

一応我々も皆、共産グループに入ってナホトカで乗船するまでは労働歌を歌ってソ連に敬意を表してきたわけであるが、日本の船に乗ってからは実に静かなものであった。

時に昭和二十三年七月二十三日でした。

シベリア回顧

島根県 多賀 穎 秀

寒さに寝つかれない収容所の第一夜が明け、昭和二十一年十一月三日の朝を迎えた。昨日の夕方、湖岸の長い土堤を歩いて来て、この粗末な建物に収容されたのだが、今朝見れば前の湖水は一夜にして固い氷にとざされている。この建物は流刑者を収容するために建てられたものだそう、二か所に望楼が建ち、銃を持った兵士がいつ

も監視している。この寒々とした収容所につつまでおらねばならぬだろうかと思うと身が凍る思いだった。

思えば九月十八日に奉天で列車に乗り込んでから黒龍江を渡り、バイカル湖の岬を通り、シベリア鉄道ノボシビスクから分かれて南下し、実に四十六日に貨物列車からおり立ったのがこのカラカンダの地であった。

うず高い古鉄の山が延々と続く中を通り抜け人造湖の長い堤防の上を進んで行くと、湖水のはるかかなたの丘陵のふもとに平たい白壁の建物が立ち並んでいるのが望まれた。これが我らを収容するための第十八ラーゲルだったのである。一体何の目的でこんな遠いところまで連れて来たのか見当がつかなかったが、やがて数日たつてから本格的なラポーターが始まり、やっとわかった。

それはこの間来るときに見た膨大な古鉄を精練する製鉄工場を増設するために我らを使役しようとするものであったのだ。それからは毎日昼食用の三百グラムの黒パンを腰に下げ凍った湖水の水を転びつまろびつ長蛇の列をつくって作業場へ通うのだった。

作業は種々の雑役だったが、何としても零下数十度の